

遺伝をテーマに意見を出し合う参加者ら
(2月4日、福岡市東区の九州大病院で)

遺伝の仕組みや遺伝医学についての理解を一般の人にも深めてもらおうと、九州大病院(福岡市東区)が「サイエンス・カフェ」を開き、啓発活動に力を入れている。遺伝子解析技術の進歩に伴い、遺伝情報が病気の診断や治療に使われるケースは増えており、識者は遺伝について正しく理解する必要性を指摘する。

(中村直人)

九大病院

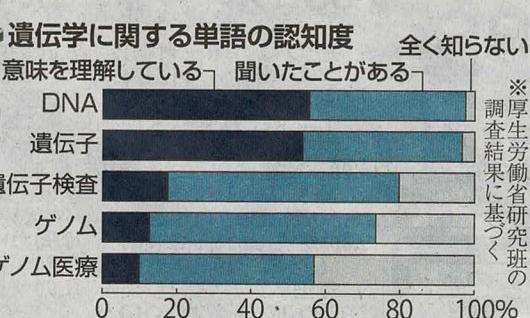
サイエンス・カフェ 科学者と市民がコーヒーなどを飲みながら、気軽に雰囲気で科学に関する会話を楽しむ取り組み。1990年代後半に英国などで始まった。日本でも2004年の科学技術白書で紹介されて広まった。

正しい知識対話で啓発

◇ ざつくばらんに 同病院で2月上旬に開かれたサイエンス・カフェのテーマは、「遺伝情報を知ることで、あなたや家族の人生はどう変わると思うか」。男性医師が最初に、遺伝の仕組みのほか、がん患者の遺伝子を調べて最適な治療法を選ぶ「がんゲノム医療」について説明。10歳60歳代の男女14人が四つのテーブルに分かれ、ざつくばらんに意見を交わした。

当初は表情がやや硬かった参加者も、コーヒーと一緒に茶を飲みながらの会話で次第に打ち解け、リラックスした雰囲気に。治療薬の開発に自分の遺伝情報が使われることについては、「大事な情報だから、悪用されるのが怖い」「本人の同意があればいいのでは」と率直な考えをぶつけ合った。自身や家族の病歴を明かし、話し込む人もいた。

参加費は無料で、参加者は大学のホームページなどと率直な考え方で開催を知り、応募した。参加者の一人、福岡市博多



厚生労働省研究班が2017年、約1万1000人を対象に実施した調査では、遺伝学に関する単語の認知度を尋ねたところ、「遺伝子」「DNA」は、5割以上の人人が「意味を理解している」と回答。一方、全遺伝情報を意味する「ゲノム」については、12・6%にとどまった。

遺伝情報の利活用については、「難しい病気の診断が遺伝

つき

单語認知度にばらつき

子の型でわかるようになり、有益」に約6割が賛成したが、就労や結婚・妊娠で不利益が生じる可能性があるとして懸念をする人が約4割いた。

実際に、遺伝情報に基づく差別や不適切な取り扱いを受けた経験がある割合は、約3%。家族の病歴などを理由に、保険会社から生命保険などへの加入を拒否されたり、高額な保険料を設定されたりしていた。

ゲノム「意味知っている」1割

区の杉本鷹之さん(40)は家族ががんになり、遺伝に関する心を持った。「遺伝情報は自分の力では変えられないが、うまく活用すれば、治療につながる可能性もある。人生を楽しく生きるために、遺伝情報とどう向き合うべきか考えたい」と語った。

◇ 病院側もメリット 同病院は2018年に厚生労働省から、がんゲノム医療を主導する中核拠点病院に指定され、来院する患者やその家族の相談に応じてきた。

ただ、一般向けにはシンセティカル・カウンセリング形式を提案。昨年9月から準備を進めてきた。

同病院の認定遺伝カウンセラー、松崎佐和子さん(37)は「コミュニケーションを重ねれば、病院側も一般人の理解度や考え方を高めることができる」と期待する。今後も年に数回の開催を計画している。

近年は、がんゲノム医療のほか、妊婦の血液から児の染色体の病気を調べる「新型出生前検査」など、

医療部が、サイエンス・カフェ形式を提案。昨年9月から大学生向けに遺伝をテーマとした「ジェネティック・カフェ」を10回以上開催。遺伝学の講義に加え、DNAの構造を示した二重らせんの模型を触ったり、家系図を用いたりして、身近に感じられるよう知恵を絞っている。

医療現場における遺伝情報の利用が急速に進んでいる一方で「遺伝」にまつた誤解は、雇用や保険契約、結婚などの差別につながる恐れもある。一方で「遺伝」にまつた誤解は、雇用や保険契約、結婚などの差別につながる恐れもある。

三宅秀彦・お茶の水女子大学教授(臨床遺伝学)は「当然な差別などを生まれないためにも、まずは多くの人が正しい知識を得て、遺伝に関するリテラシー(情報運用能力)を身につけることが重要だ」と指摘する。



特設コーナーに並べられた村上春樹さんの新作長編小説(13日前、福岡市中央区のジュンク堂書店福岡店で)秋月正樹撮影

ファン。新刊が出ると毎回読んでいるので、楽しみに待っていた。自宅に帰ってじっくりと読みたい」と笑顔だった。

同市・天神の書店「福岡文庫本店」は午前9時半